

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 4年 3月12日
(106号)



[事務局] 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
発行 学塾・中之島事務局

人間学講座
第112講

「禅の教えに学ぶ」

横田南嶺 管長



■ 拈華微笑
ねんげみしょう

禅とはどういうものなのか。禅の究極の要とは「拈華微笑」であります。これは禅の起りとも言えます。ある時お釈迦様が説法をなさろうとされた。ところがお釈迦様は一輪の花を取り上げ（拈ずる）られたまま一言も発せられない。集まった弟子たちは、どうしたことかと思議に思っていたのだが、その中の一人摩訶迦葉尊者だけは、お釈迦様を取り上げられた花を見てにつこりとされた。それをご覧になられたお釈迦様が「自分の教えのすべてはこの摩訶迦葉に伝わった」と仰せられた。この話が禅の起りだと言われています。

諸悪莫作 衆善奉行 自浄其意 是諸仏教
この言葉は「諸々の悪をなすことなかれ、諸々の善きを行い、自らの心を清くせよ」という意味です。実に簡単ですが、何が悪いことで何が良いことなのか。その答えとなるのが、次の文章です。

一粒でも捲くまい、ほほえめなくなる種はどんなに小さくても、大事に育てよう、ほほえみの芽はこの二つさえ、絶え間なく実行してゆくならば、人間が生まれながらに持っている、いつでも、どこでも、なんにもものにも、ほほえむ心が輝きだす人生で、一ばん大切なことのすべてが、この言葉の中に含まれている
(松居桃楼『微笑む禅』)

松居先生は、善いこととは「微笑み」の行いであり、悪いこととは、微笑めなくなるようなことである、と受けとめられたのです。微笑みとは、ともしれば難しくもなさそうですが、実は奥深く、なかなか

かに侮れない。

笑いにも、楽しいから笑う、嘲り笑う、などもありますが、花が咲くことも「笑う」と言います。「念ずれば花開く」は真民先生の代表作ですが、すべては中核に人の念いがあつてこそ、そこに花開く。これはお釈迦様の心に直結する言葉だと思います。

■ 母がわが子を護るように

古い經典のお釈迦様の言葉に「あたかも、母が己が独り子を命を懸けても護るように、そのように一切の生きとし生けるものに対して、無量の慈しみを起こすべし」という言葉があります。これはお釈迦様の心であり、仏教の一番の核心だと思っています。慈しみの心を自分の身内だけではなく、あらゆる命あるものに起こしていくことは、仏教の究極の教えでありましょう。あらゆる人に慈しみの心を持つことは難しいことのように思えますが、日本人はわが子を命を懸けて護るように、一切の命あるものを護り育んできたという事実はこれまでもたくさんあります。しかしながら、今そのようなことが欠けてきているようにも思えます。

私の出身地である和歌山の歴史の中の誇りは、「稲むらの火」、大津波が村を襲ったそのとき、人々を助けるために稲むらに火を放ったという話です。そしてもう一つは「エルトゥール号」の話です。

1890年視察団を乗せたオスマン帝国(トルコ)の軍艦エルトゥール号は、台風に遭い、紀伊半島・大島の沖合で座礁、沈没してしまいます。船には六〇〇人以上の人が乗っていました。大島の村人の懸命の救助活動で六九名の人が救われました。自分たちはひもじい思いをしても、目の前の傷ついた異国の人々を大事に、なんとか助けたいという思いだったのでしょうか。そうして救助された人々は無事に帰国していったのです。

それから九五年の時を経て、イランイラク戦争の

さなか、イラクのフセイン大統領が、四八時間後に上空を通る飛行機は全て撃ち落とすと発表し、テヘランの空港には二一五人の日本人が取り残されてしまった。その時にトルコが自国民よりも優先して日本人を救ってくれたのです。トルコの国が「エルトゥール号のご恩を忘れてはいません」と言ってくれたのです。

■ 人生の喜びとは

エルトゥール号事故と同じ1890年、ラフカディオ・ハーンが来日しています。L・ハーンは日本人をこのように記しました。

「日本人のように、幸せに生きていくための秘訣を十分に心得ている人々は、他の文明国にはいない。人生の喜びは、周囲の人たちの幸福にかかっており、そうであるからこそ、無私と忍耐と、われわれのうちに培う必要があるということ、日本人ほど広く一般に理解している国民は、ほかにあるまい」

(『新編日本の面影』)

人生の喜びとは自分が好きなことをするということではなく、周りを幸せにすることであり、当時の日本人は広く一般的にそのための無私と忍耐を理解していたのです。

日本人には「怨親平等」という敵味方を区別せず平等に供養する考え・心がある、とかつてお伝えしました。特別な修養や教育を受けたわけではないであろう大島の村人にも、わが子を慈しむように、身内も他人も平等に大事にする心がありました。それがいつの頃からか、自分さえ良ければというものに変わってきてはいないか、反省し修正していかねばと思います。

我を忘れ人のために尽くす心のことを仏教では「仏心」と言います。人間は誰しも生まれながらにその仏心を持っているのです。

(抄録 中川千都子)

《感動語録集》

◆横田南嶺管長

「禅の教えに学ぶ」

- * 人間は、誰もが仏心を持っている。
- * 良いことをすると、微笑みがあること。
- * 敵も味方も同様に供養する。
- * 幸せに生きる秘訣は「無私」と「忍耐」
- * 苦しい時、辛い時ほど笑顔で!!
- * 「微笑むこと」はどこでも誰でもできる。
- * 歩く時は一步一步畳にめり込むように歩く。
- * 考えは頭で考えないで、足裏で考える。
- * それぞれがそれぞれの者のことを思いやる心を持つ。
- * 「微笑」は努力してできるもの。
- * 自分の心を磨きなさい。
- 悪いことはしない。
- 良いことはする。
- * 一番簡単にできる手段は、微笑み。
- (いつでも・どこでも・誰でも)
- * 念ずれば花ひらく
- * 禅の教えを学ばせていただくことで、
足の裏から学ぶことを知った。
- (寺田先生は毎晩寝る前に足の裏を両手でさすって
おられることを思い出した。)
- * 苦しい世の中であればあるほど、微笑みを忘れない。
- * 微笑みで、自分も周りも、温かく照らせる人になろう。
- * 思いやりの心、微笑みの心こそが大切であることを
学びました。微笑みを忘れずに生きようと強く思
いました。



- * 微笑みこそが最大の「仏心」であること。
- * いま、人々からは笑顔が^{ほほえみ}消えていることを実感して
いました。いま自分に何ができるかと考える日々で
したが、すぐに実践できる素敵な方法を学びました。
改めて笑顔の素晴らしさを感じました。
- * 何は善くて(微笑むこと)
- 何が悪いのか(微笑まなくなること)
- * 辛い時だからこそ、微笑む努力を…。
- * 人生の喜びは、周囲の人たちの幸福であるからこそ、
日本人ほど、無私と忍耐を心の内に養うことを理解
している国民は他にいない。

《森信三先生に学ぼう!!》

★腰骨を立てる教育

「腰骨を立てる教育」において何よりも大事なこ
とは、教師自身が先ず自らが「腰骨を立てる」実
践者であることです。

そして「これ以外には、子どもたちを真に主体的
な人間にする途はない」と、万策尽きたあぐくの
はての確信を持つていなければならぬのです。

げに腰骨を立てさすことは、「性根のある子にす
る極秘伝」なのです。

★男の幸福と女のしあわせ

男の幸福とは、結局自分の仕事に一切後顧の憂い
なく打ち込めることです。少なくとも妻が(一)家計を
整えて、(二)子女の養育について、何ら後顧の憂いが
ないことだといえます。

これに対して女性のしあわせとは、夫をして後顧
の憂いなく、雄々しく敢闘させるとともに、子女を
健全に養育するという任務を、立派に果たすことだ
といってもよいでしょう。

★「礼」というもの

コップを伏せたままですと、いくら上から水を注
いでも、少しも内に溜まらないのです。ところがいつ
たんコップが仰向きにされると、注いだだけの水は、
一滴もあまさずそこに溜まるのです。これはまさに
天地の差と言うべきでしょう。

伏せたコップを、仰向けに直す——これが、広い
意味での「礼」というものです。形の上から敬う心
の起きる受け入れ態勢をする必要があるのです。

(森信三先生『魂の言葉』より)

《わたしのハガキ道》

寺田先生に導かれて

近藤宏枝

平成五年五月、『師教を仰ぐ』（寺田清一著）を読み、森信三先生の「自銘のことば」の感動を三通に渡るはがきで寺田先生にお送りした事が、私が初めてはがきに触れて、はがきと共に生きる事となるきっかけでした。

「お会いした事もない森先生の姿が見えました。それから次々に読んでいくのですが、涙が止まらないのです。こうしてお手紙を書いていても涙があふれてくるのです。今まで味わった涙とは、質の違うものだという事は分かるのですが、説明は自分自身には出来ません。（以下省略）」

この拙い内容に寺田先生からの「連続三通のおハガキ」を感銘深く拝読いたしました。

建国大学を敗戦後引揚げてこられて間なきころ、「自銘の言葉」として自らの心に銘ぜられましたこの言葉に、いたく感動せられたというお便りを頂き、森先生の念波の波動が、あなた様の純粋な波動と周波数を同じくし、見事にキャッチして頂いたとは思われません。

この一事によって、今後、森先生の魂があなた様に入りこんで、大きな働きかけをなされるものと確信いたします。

そして更に同日二通目には、

の「みいのちの自銘の言葉にきみ触れて

涙とまらずと きくはうれしき

の「みいのちの呼応」といはめこの時し

師の魂に相ふれるとき

の「一生を支えられたる心願の

きわみの言葉この一語こそ

見知らぬ私に、忝くももったいなくも、有り難いこの三首を詠んで下さったのでした。

こうして翌年には、個人通信「こだま通信」を名付けて下さり、色々とご指導を賜り、今では三〇〇号を超える通信となったのは、寺田先生が私の手を引き続けて下さったお陰なのです。

今でも私はただ寺田先生に「褒めて頂きたい」それだけの思いで、はがきと共に一步一步、歩みを進めるだけでございます。

《塾生の本棚から》

『「自分の木」の下で』

大江健三郎 著

北嶋紀子

社会人になって1年を過ぎた時に手に取ったこの本は、私の生き方の指針を与えてくれました。今でも度あるごとに読み返しています。数多く挿されている妻の大江ゆかりさんの画も大変美しいです。

本来、この本は、著者大江健三郎が子供に向けて書いたものです。このため、冒頭、「なぜ子供は学校に行かねばならないのか」という問いから始まります。これに対して、著者は、まず「大切な問題は、苦しくてもじつと考えてゆくほかにありません。」と語りかけます。そして、「自分の心のなかにある深く豊かなものを確かめ、他の人につたえ、そして自分が社会にながってゆくための、いちばん役にたつ言葉」「自分

をしつかり理解し、他の人たちとつながってゆくための言葉」を習う、みつけるために学校へ行くのだと導きます。

その他、「生き方をやりなおすことができる。」「いまの自分のなかの「人間」を大切にしてください。」「生きるためのー生き延びるためのー選択は、結局ひとりでやるほかにありません。」「など生きていくための珠玉の言葉が続き、「きみは大人になっても、いま、きみのなかにあるものを持ち続けることになるよ！勉強したり、経験をつんだりして、それを伸ばしてゆくだけだ。いまのきみは、大人のきみに続いている。」「きみは「自立した人間」だ。大人になっても、この木のように、またいまのきみのように、まっすぐ立って生きるように！幸運を祈る。さようなら、いつかまた、どこかで！」という言葉で終わります。

四〇代後半になっても、強風が吹けばよろけ、迷い、自分の言葉の輪郭を探し続けている私に、これらの言葉は響き、勇気づけてくれるのです。



出版社：朝日新聞社
(2005/1/1)
文庫：226ページ
ISBN-10: 4022643404
ISBN-13: 978-4022643407

大江健三郎 1935年愛媛県生まれ。東京大学仏文科卒。大学在学中の38年、『飼育』で芥川賞受賞。以降、現在まで常に現代文学をリードし続け、『万延元年のフットボール』（谷崎潤一郎賞）、『洪水はわが魂に及び』（野間文芸賞）、『雨の木』を聴く女たち』（読売文学賞）、『新しい人よ眼ざめよ』（大佛次郎賞）など数多くの賞を受賞、94年にノーベル文学賞を受賞

《人間学塾・中之島》次月日程

【4月日程】

◆ 日程 4月9日(土曜)

受付 午後0時〜

◆ 会場 大阪城ホール(会場には気をつけてください)

内コンベンションホール

◆ 講師 比田井和孝氏

「幸せな人生を歩むために

とても大切なこと」



1968年長野県望月町(現佐久市)生まれ。東京理科大学を卒業。現在は上田情報ビジネス専門学校 副校長。日夜学生の幸せを考え、バリバリ実行していく熱血漢で、その行動力と人柄を慕って、様々な職種の方々が全国から彼を訪れる。全国各地からの講演依頼が後を絶たず「人生を変える一日になりました」など、感動の声が寄せられている。

◇ 新規塾生をご紹介します。



人間学塾で、

坂本セツ

人間学を学ぶことによって、生命の弾力を失わないで貫きたいと思います。

《芳信抄》

埼玉県 山下武彦様

木南一志先生には、深く教えられるものがありました。「下座行」と森先生がよく言われましたが、掃除を行えばすべて降りていくことにはならないのです。

鍵山先生のお話を伺っておりますと自然に頭が下がりますが、そこには取り組み方の努力があったのです。自己を見つめ問い続ける中に「降りていく生き方」が生まれるのでしょうか。私の中学時代の恩師林芳和先生も良く「教師は、自ら学び続ける者でなくてはならない」と言われていたことを思い出しました。

岡山市 柴田久美子様

木南先生のお話にたくさん学びを頂きました。「努力を幸せだと感じて実行」偉大な鍵山先生のお導きに手を合わせ精進してまいります。

宮城県 加藤秀夫様

掃除をすることで、取り組み姿勢によって謙虚になる人、傲慢になってゆく人がいること、鍵山相談役のようにどこまでも下へ下へと降りていく姿勢に大きな努力で小さな成果を積み上げてゆきたいです。

川崎市 大出雅一様

木南様が弓道の師範の方から教えられた「教える立場に立つと、教えるだけではないけない。できない側の人の立場に立ち、その人の気持ちにならないと、教えることはできない」。「その人の不自由さ、辛さを自分に課すこと」と、更に教えることの核心に迫っていきます。教える上で傲慢さは大敵です。教える側に身を置いた者として、木南様のお話は、身に沁みました。

四国中央市 桂 誠司様

木南一志様の講話抄録に、感嘆しながら拝読しまし

た。徳のある方はこういうことをされているのです。鍵山先生の素晴らしい謙虚さも良く解りました。

豊田市 坂部智一様

できない人のやり方が、できるかどうか。その人の不自由さ、辛さを自分に課すと考えると、自分の傲慢さに気づくこと、教えて頂きました。ロシアがウクライナに侵攻しました。中国をこれまで話せば分かる相手と思っていました。中国をこれまで話せば分かる相手が幸せが消えると思っていました。鍵山先生もずっと以前より警鐘を鳴らされていたことが、ようやく分かりました。

東京都 小林礼治様

さて先日は、「中之島ニュース」の紙面に、「私の本棚から」への寄稿文を掲載頂き、素敵な仕上がり感謝申し上げます。

また、聴講に伺いお会いできますこと、楽しみに致しております。

「学問・修養」

● 何のために学問・修養することが必要か。根本眼目を明確に。

● 自分が天から受けた本性(天分)を十分に実現する途を見出す為。

● 天分の発揮は単に自分のことを考えているだけではダメ。

自分というものを越えた有る何物かに、自己をささげるといふ気持ちが必要ではない。(自己本性だけではダメ)

『修身教授録』より